

故郷の妻へ、戦地ビルマからの手紙①

会期：令和7年7月3日（木）～29日（火）

久留米市立六ツ門図書館展示コーナー

令和5年11月29日付けで寄贈を受けました「宮原美奈子氏寄贈資料」を初公開します。

本資料群は、田主丸町出身の医師・西原肇さん（1915～45）に関するもので、手紙や写真、戦後の記録など、総数73点が伝わります。肇さんは、昭和15（1940）年12月に梅子さんと結婚、同18（1943）年にビルマ派遣第118兵站病院に軍医見習士官として配属され、同20（1945）年5月25日、軍医少尉としてビルマ（現ミャンマー）のシタン川付近で戦死しました。

本展では、戦地ビルマの肇さんから妻梅子さんに宛てた手紙を中心に、軍事郵便35通を3回に分けて紹介します。

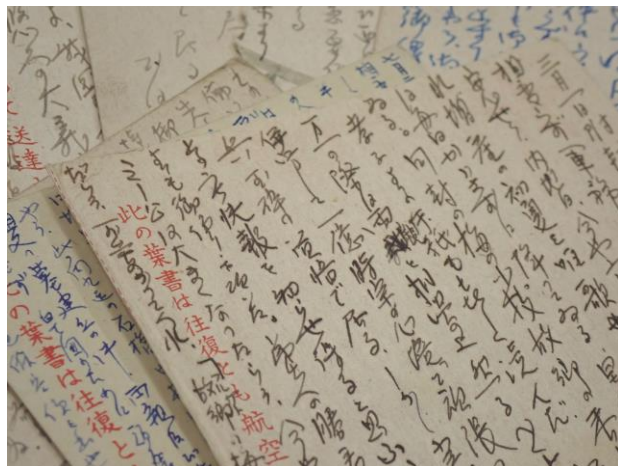
●7月展示：昭和18（1943）年4月～12月

最初の手紙は、まだ国内の小倉陸軍病院にいる間に書かれたもので、梅子さんに面会できる時間を伝えています（No.1）。それより後の手紙は、いずれもビルマから出されたものです（No.2以降）。虫の声、香り立つ果実、花咲き乱れる風景の描写は、ビルマの雨季から乾季への移り変わりを身近に感じさせてくれます（No.2～5）。しかし戦況に関しては、報道以上のことは伝えず、自分がいまどこにいるのかも明らかにできませんでした（No.11）。ビルマ派遣第118兵站病院（森第6770部隊）は本院、分院、患者療養所に分かれ、それぞれ軍事作戦に伴い移動することになりますが、肇さんがいつ、どこで軍務に服していたのか、ほとんど分かりません。

肇さんのどの手紙にも妻梅子さんや親族を思いやる言葉が綴られ、ビルマでの迎春の仕度を伝える大晦日の手紙には、門松に「松竹はあるが梅がない」とあります（No.12）。

●軍事郵便の一部

文面には「玉砕の覚悟で居る」（写真中央）などがあり、自身の心境や家族への思いが綴られている。



●軍事郵便

戦時中、戦地にいる兵士たちが日本国内の家族などとやりとりをした郵便物のことです。機密保持のために検閲を受け、集約されてから船舶や航空機で運ばれたため、宛先に届くまでに相当の日数がかかりました。また、戦況などの事情により、必ずしも発信順に届くとは限りませんでした。

故郷からの手紙は戦地の兵士たちを慰め、戦地からの手紙は家族が戦場に送り出した兵士たちの生存を確認するほとんど唯一の便りでした。

今回の展示品には、発信や受取の日付が不明のものがあります。文面や背景などから推測して、できるだけ発信順になるよう並べ替えを行っています。

●今後の会期と内容

②令和7年8月1日（金）～31日（日）

：昭和19（1944）年1月～4月

③令和7年9月2日（火）～30日（火）

：昭和19（1944）年5月～12月